

物語世界の變貌

——擡頭する脇役たち——

豊 島 秀 範

一、問題意識の所在

王朝末期から中世にかけて描かれた物語は相当数にのぼる。だが、その多くは散逸したり、欠損部分があるなどして、全き状態で現存する物語は決して多くはない。その数少ない現存作品についても、従来はあまり顧みられることがなかった。現在ではかなりの数の研究者が、中世物語の研究を手をかけているようだが、それでもまだ充分ではない。そこには、やはり擬古という名称が指し示してきた、王朝物語の亜流という意識が根強く作用し続けていることがある。

しかし、中世の物語の全てが、亜流・模倣の概念で片付けられるものでは毛頭ない。中世の作品のみに認められる注目すべき特徴が十分に読みとれることも確かなのである。決して目新しい言挙げではないが、『源氏』などとの文学性の優劣や、類似性の指摘などにすぐに走るのではなく、まず中世物語の特徴と、それのもつ意味とについて、充分に考察を加えていく必要がある。それが中世の物語研究において、最も大切な点であろう。

そこで、ここでは中世の物語の特徴の一つとして、脇役達の活躍の場がそれ以前との物語と比較して、極めて増大してきていることに注目して、以下に論じてみたい。取り上げる作品は、当時かなりの評価を得ていたと思われる『いはでしのぶ』『海人の刈藻』『苔の衣』『小夜衣』の四作品とし、およそ成立した順を追って考察を加えてみる。

二、『いはでしのぶ物語』——デマ事件を中心に——

『いはでしのぶ物語』は『無名草子』（一二〇二年頃に成立）には見えていないが、『風葉和歌集』（一二七一年撰進）に三三首の歌が採られているので注¹、その成立はおおよそ一二〇二―一二七一年の間と考えてよいと思う（注²）。

物語前半部分の主人公内大臣は、白河院の女二宮（一品宮）の降嫁を得て、主に内大臣の心意を通してではあるが、幸せな日々を過ごしていることが巻一に展開される。

巻二に入ると同時に、物語の場面が伏見へと拡大する。伏見には、内大臣の異母兄弟・伏見入道式部卿宮が二人の娘（大君・中君）と共に住んでいるからである。九月の末に春日神社参詣の帰途に伏見入道を訪れた内大臣は、姉妹を垣間見るが、一品宮以上の女性とは思われない。ところが、一〇月に入ると伏見入道の病が重くなり、娘の将来を案じる伏見入道の要請のままに、内大臣は大君と結ばれた。間もなく入道は逝去する。新年を迎えて、淋しく住む大君を上京させることを決意した内大臣は、九州から上京していた大氏の乳母と相談の上、乳母の家に伏見大君を移す。以上の事は全て一品宮の承諾の許に行われる。一品宮は伏見大君の立場に同情をさへ寄せている。

ところで、一品宮が第二子出産で難産となった際に、伏見大君の故母君が死霊として現れ、内大臣に恨みごとを言う事件が生じた。以後、内大臣は伏見大君の

所へ通うことをせず、大君は嘆きの日々を送る。そして、世話役の大式の乳母が石山寺参籠の留守に、故母君の姉妹である尚侍の招きにより、大君は宮中に行く。そこで思いがけず帝に発見され、寵愛を受けた。伏見大君を宮中に招き入れた尚侍は苦慮するが、帝の強い希望と、帝寵を良しとする大君付きの弁の乳母の気持に圧され、尚侍は苦し紛れに、大君は失踪したと装い、人々の口を封じる。後に内大臣は大君の行方不明を知り嘆くが、成す術もない。そのような所に、次のような噂が流れ出たのである。

(一) 噂(デマ)の効果

なにとあるべき御事のはじめにか、「かの伏見の女君の思ひかけず内裏に参り給へりけるほどの有様。内大臣の心ざしもいと深くて、つや／＼(一品)宮の御ことにも劣らず、あやまりてすみざまなりければ、かくひきたがへ、(伏見大君が)雲居のよそになり給へる(内大臣の)嘆きおろかならんやは。たゞ一筋に、『ありし御物の怪の後、院・后の宮の、尚侍を語らはせ給て、(伏見大君を)内裏へ参らせさせ給つる。』とて、女宮(一品宮)をも、今はことのほか疎々しき事に思ひ聞へ給つゝ、(内大臣は)世と共に独り眺めをしつゝ、涙に沈みておはすなれば、(父の)大臣なども口惜しき事になん思ひ嘆き給なる。」と、いかなる化け物の言ひ出でける事にか、(白河)院の上の御耳に、つゞ／＼と聞かせ給てけるを、同じ君と聞へさする中にも、(白河院は)あさましう気高き御心の、雄々しういかめしきにて、なか／＼人の少しもわたるさまに物を言ふべき事とも知らせ給はぬに、まいてかばかりの事なれば、ゆめにてもひがごとならんとは思されず。(注3)

「なにとあるべき御事のはじめにか」(今後どのようなことになる事件の発端なのであろうか)と危機的状況が暗示されているように、誰からともなく人々の間に広まった伏見大君の失踪に絡むこのデマは、内大臣と一品宮の上に、一大波紋を投じた。

デマの内容は、

○伏見大君への内大臣の愛情が、正妻一品宮へのそれよりも深いこと。

○それを不満とする一品宮の父白河院と母后の宮とが、尚侍を説得して、伏見大君を宮中に参上させたこと。

○それに対して、内大臣の父・大臣などが遺憾に思っていること。

以上の三点に集約できる。物語の筋を追って行く限り、一品宮に対する内大臣の愛情は深く一途であるといつてよい。

それに比べて、内大臣と伏見大君との関係は、『源氏』での薫が宇治の入道から姫君の後見を託されたのと同様の構図であって、内大臣が進んで求めた女性ではなかった。ただし、伏見の入道の病が重くなり、死の直前に入道の要請のままに、直ちに内大臣と大君との結婚が成立したということが、構図は同じであっても、薫と宇治の大君の場合と比べて決定的に異なる。だが、伏見大君との結婚について、内大臣は正妻の一品宮にも話しをしており、むしろ、一品宮は伏見大君の立場に同情をすら寄せている。さらに、一品宮の出産の折に出現した、伏見大君の故母君の死霊の事件以後、内大臣の足は伏見の大君から遠のいていたのである。内大臣と一品宮との間には、二人が別れなくてはならない直接的要因はない、と言つてよい。いわば事実無根である。ところが、その噂が、厳しい性格の白河院の耳に入つたことによつて、院の怒りを被り、一品宮は白河院の許に引き取られてしまう。『いはでしのぶ』は巻三以下は完全な本文が伝わっていない。小木喬氏の推定では八巻に及ぶ内容を持っていたとされるこの物語の未だ前半である巻二の時点で、内大臣と一品宮とが引き裂かれ、その後再びもとの仲に復することなく、巻三で一品宮は剃髪し、内大臣は薨去することとなる。一品宮はその後も女院と称されて巻八の最後まで生存するが、二人の間に特別な理由が無いままに別れを余儀なくさせる原因となつた噂に、充分な威力と効果とを与えて物語に持ち込んだ作者の意識は、注目に値する。「物語を転回させる契機として噂(デマ)を取り上げたことは、本物語の特色であつて、他には見当たらないことである。」(注4)と小木喬氏も述べているように、この一件は、それまで理想的な二人として描かれてきた内大臣と一品宮との仲を、ものの見事に一変させてみせたの

である。勿論、そこには、噂を信じて疑わない白河院の性格と、一品宮自身も、内大臣に降嫁した当初から父院や母后への思いや宮中での生活が忘れられないままに過ごしてきたことが、ここで父院の言うがままに内大臣と別れて白河院の許へと帰っていくという人物像を描き得るための伏流としてあったことに思い当たるわけである。更には、《はいはでしのぶの恋》を標榜するこの物語において、一品宮と満ち足りた精神生活を営む内大臣の物語は、決して主流とはなり得ないということもある。あくまでも主流は、物語全体を通して終始一品宮を慕いつつも逃げられずに終わる中将（後の関白）の物語にある。ただし、『狭衣』での狭衣大将と源氏宮の場合のように、恋の構図を冒頭から明らかにすることはせずに、まずは理想的な内大臣の結婚生活を描いてみせ、その突如の破綻による衝撃を読者に与えた後に、物語を主題に近づけていくという形を取っている。その意味では、主題に即応したまとまりという点からは弱点となるものの、意欲的な作品であると言える。

(二) 噂を惹起する女房達の挙動

噂による効果は、それが日新しい着想であることと、およそ読者の心意をある程度実感を以って納得させ得るといふ点にある。しかし、噂を可能にしている最大の要件は、大貳の乳母・弁の乳母・尚侍^{なしのう}といった脇役達の登場であり、その働きであることを見過すことはできない。中でも尚侍は重要である。

内侍のかみと聞ゆるは、（伏見大君の）故母上の御はらからぞかし。院の御時参り給へりしが、いとゞきにもはせざりしかど、たゞ宮仕ひざまに、（帝の）御腰打ち、御学問の折御文巻きをきなどやうの事に、つき／＼しうおはしければ、上の御局につとさぶらひ給ひて、……昨年、院の御位下りさせ給し後も、今に、内裏に、昔の御局変わらず侍ひ給を、上（今の帝）も嬉しき事に思し召されて……。 （三六一頁）

デマ事件の直前に初めて登場した尚侍は、伏見大君の故母上の姉妹で、白河院の御代に妃の一人として参内したが、寵愛を得られず、女官として奉仕していた。

だが、信望は厚く、今の帝の御代にも仕えている四〇歳余の女性である。死霊事件以後、尚侍は姪である伏見大君の立場を思いやって、手紙を書いては励まし、機会を見て自分の居る宮中に一度訪れるよう勧めていた。

「内侍のかみの、あながちに泣く／＼（伏見大君を）ゆかしがり聞え給へど、さりぬべき暇も無きを、かゝる折あからさまに渡り給へかし。さてかの事ども細かに聞かせ給へ。」など、（弁の）乳母の言へど、（伏見大君は）よろづ物憂くて、たゞ涙にしはれ伏しつゝ、思しもたゞぬに、かしこ（尚侍）にも、（大貳の乳母が留守だという）良き暇をきゝつけて、「つや／＼内渡りとして便悪しき事も有るまじ。かまへて／＼、ときの程渡り給へ。」と、（伏見大君を）迎へに奉り給へりけるに、例の弁の乳母勧め聞えて、はか／＼しからねど、留守の物どもの有るには、（具合が悪いので）乳母の歩きの様にもてなして、（大君を）いて奉りたりける程に、思ひかけず、（帝が）その夜雲のかけ橋踏み通はせ給つゝ（尚侍の局に來られて、大君を見初め）、なのめならずあはれに思されけるまゝに、（大君を）ゆるさせ給はで……。 （三六四頁）

内大臣の要請で伏見大君の世話をしていた大貳の乳母が石山寺参籠の留守に、尚侍と弁の乳母の勧めで、伏見大君はしづぶ宮中に尚侍を尋ねた。そして思いがけず帝に見初められたのである。

尚侍と大君との一言の会話さえ無く、大君が宮中に入るやいなや帝が登場することから、尚侍や弁の乳母のここでの役割がどのようなものであるかを知ることには容易だ。尚侍の役目は、伏見大君を宮中に招来し得る立場の人物であるということである。二代の御世に仕えていること、特に当帝とは親しい立場に居るといった事々しい尚侍の紹介の必要性も、全てそのためである。弁の乳母の役目も同様である。

尚侍の登場は巻二の半ばに於てであり、巻三以降は完全な本文がないためにその働きの全貌は不明だが、夕顔の侍女として、更に玉髪にも付き添った右近のようには、重要な人物として以後も物語に登場し続けたとは思われない。しかし、この場面で尚侍の挙動が起因となり、物語を大きく転回させるデマ事件を成立さ

せたわけである。作者の意識からすれば、デマ事件にさらに説得力と効果とを与えるための布石として、尚侍を案出したわけであろう。だが、重大な事件を可能とするその陰に、脇役達の存在があり、その挙動を重要なものとして筆を費していくという作者の意識には、注目しておく必要がある。それは、脇役達の活躍が増すにつれて、物語の質も少しずつ変貌すると考えられるからである。デマ事件という特異な着想と共に、それを支えている尚侍を中心とする脇役達に注目する所以である。

八巻に及ぶとされる物語の全貌が充分にはわからないため正確には言えないが、物語の前半である巻二でのデマ事件は、いわば「はいはでしのぶ」を主題とする物語に至る一つの踏み台であって、それは作者も承知していたはずだ。にも関わらずこれほど書き込んだ理由は何か。勿論、噂に寄せる作者の関心の強さを示しているのだが、それ以上に、人の誠意に基づいた挙動や配慮も、時としてそのままでは受け入れてはもらえないものだという、現実凝視の目がそこに感じられる。あるいは、あれほど強調した尚侍の信望も、内大臣の誠実さも、全てはあだとなる。それを演出してみせたのが、尚侍を中心とした女房たちであったのだ。しめやかな主題の物語と同時に、その主題とは異質なデマ事件を取り込んでくる意識も、やはり当時人々の好むところであったろう。その落差が、物語の質を変えている原動力となつてはいまいか。

三、『海人の刈藻』——女房たちの種々相——

『海人の刈藻』は『無名草子』(二二〇二)において、

今様の物語にとりては、『海人の刈藻』こそしめやかにえんあるところなどはなけれども、言葉遣ひなども、世継をいみじくまねびて、したゝかなる様なれ。物語の程よりはあはれにもあり。(注5)

の語り出しを以って、今様の物語の中では最も詳細に論じられていることから、当時『海人の刈藻』はかなりの評価を得ていたと思われる。また、周知のよう

日来撰出物語月次、十二月不入源氏并狭衣、於歌者拔得、他事雖不可然、源氏当時此所撰、夜寝覚、御律浜松、心高、東宮宣旨、左右袖湿、朝倉御河開留、取替波也、末葉露、海人刈藻、遊(注6)、以十物語撰毎月五、金吾清書訖、(国書刊行会、巻三、三四一頁)

とあり、定家も当物語を見ている。さらには、『風葉和歌集』(二二七二)にも、主人公権大納言(もとの三位中将)の歌三首と初瀬の神の歌一首の、計四首が見えている。『拾遺百首歌合』にも権大納言の歌三首があり、そのうち二首は『風葉集』の歌と重なるので、都合五首の和歌について知り得る。但し、その五首の歌が現存本の中には一首も無いことが決定的な証拠となつて、現存本は『風葉集』撰進(二二七二)以降の改作であるとされている。古物語は平安朝の物語で、それを大幅に改作したことは認められないが、中世の好みを当然加味しながら改作したものと思われるので、中世的な要素の入った物語として考えてもよからう。以下、『無名草子』の評言を追いつながら論じてみる。

(一) 心深く好もしき女房——江侍従——

一条院の西の対に、権中納言・三位中将住み給ふに、……中にも権中納言は琵琶しのびやかに調べつゝ、『從冥入於冥、永不聞仏名』と口ずさみ給へる程こそいみじけれ。按察大納言上の失せの程こそあはれなれ。又江侍従内侍こそいと心深く好もしけれ。大納言山へ登りさまに、そのたまといふ童に逢ひたる程こそいみじくあはれなれ。(二二二頁)

『源氏物語』の宇治十帖、更には『狭衣物語』の影響下に連なる物語の多くは、仏教色を極度に深めていく。その点について多少述べたこともあるが(注7)、『海人の刈藻』に対する『無名草子』のここでの評言も、権中納言がしめやかに読経する様子を第一に称揚する。按察使大納言の北の方(後妻)の死に対する賞賛は、継母でありながら先妻の子女を大切に育てあげ、人柄も良く、

院・内・大宮・関白殿・右大臣殿・別当の中納言など、『斯かる人又世にあらじ』と歎き惜しみ聞え給ひて、御使どもあり。(注8)

と皆から惜しまれて死んだその人柄の良さが、称えられた直接的対象であろう(注9)。さらに、死後の法要が弟の律師や息子の阿闍梨を初めとして、「山の座主も若君(阿闍梨)の御ためと思し、(権)大納言殿(継娘の夫)の思したるも忝くて、御弟子百人、いかめしくて(山から)くだし給ふ。」(巻二、六八〇九頁)と、盛大な七日ごとの営みによる仏教的な雰囲気も、直接的には北の方の死を賞賛する要素となつていよう。また、「大納言(もとの三位中将)山へ登りざまに、そのたまたといふ童に逢ひたる程こそいみじくあはれなれ」という部分も、女御との間に御子が生まれていながら結ばれることもなく出家していく哀切の情を称えた表現であるが、それは出家という仏教的条件下に生じていることは言うまでもない(注10)。

『無名草子』の作者が評師の基準として良しとする「あはれ」の内容がどのようなものであるかは、この後に続く当物語の評言を読めば一目瞭然であるのだが、「物語の程よりはあはれにもあり」と物語全体の印象を評した中には、三位中将の出家に至る経緯を軸とした仏教的な要素が含まれていたことは確かである。

ところで、ここで最も注意したいことは、「江侍従こそいと心深く好もしけれ」の一文である。江侍従は近江守の三女で、賀茂祭の折に素姓を伏せて「葵につけたる文」を三位中将に贈り、「げにされたる人のわざかな」と思われていた女性である(巻一、三〇頁)。後に、三位中将は比叡山に座主の病氣見舞に行く途中、小野を通つた時に、その女性が近江守むねたの娘であることを知る(巻一、四八〇五〇頁)。三位中将の勧めで、三河守に嫁すのをやめて宮中に出仕し、江侍従と称され(巻二、八二〇三頁)、二人の仲は深まる(巻三、一二三〇四頁)。出家の際にも三位中将は江侍従を心に留めている(巻四、一九三〇四頁)。以上が江侍従についての概略である。

『無名草子』で江侍従を「いと心深く好もしけれ」と評したのは、受領の娘ではあるが、三河守に嫁ぐことをせずに、宮中に出て三位中将に愛されるに至った志の高さと身の処しかたを称えたのである。勿論、『源氏』の夕顔にも似た登場の仕方も良しとしているのであろう。だが、いわば同じ「中の品」の女性ではあ

っても、夕顔の場合とは異質であり、結局、江侍従は三位中将の妻とはなり得ていない。三位中将が出家を覚悟してまで思い続けた意中の女性に女御であつたわけ、江侍従は最後まで脇役に徹しなくてはならなかったわけだ。しかし、それにも関わらず、脇役の江侍従が読者の注意を十分に引く程の人物として登場しているところこそ、注目する必要がある。江侍従を初めとして、やや大げさに言えば、『海人の刈藻』は女房主導の物語と思われるほどに、実に多くの女房達が登場し、行動している。江侍従もその一人で、三位中将の思いに対して誠意を以て応えていることから『無名草子』に取り上げられたわけだが、その誠意と情とが、この物語の特徴でもある。以下、更に何人かの脇役を登場させてその活躍を追ってみたい。

(二) 心あらまほしき女房——対の御方——

帝の寵愛を一身に集めた藤壺女御(按察使大納言の三君。後の中宮)の世話役として出仕し、「対の御方」と称された女房も重要な女性である。権大納言によつて、その妻大君(按察使大納言の長女)との会話の中で最初に紹介される。

いさや、あまた見しなかに、宰相の娘とかやいひし人こそ、さまかたちなどはよからねど、心の奥ゆかしう思ひ入れて、頼もしきつひのよる瀬には思ふべかりしかど、見る日ぞ少しまはならざりしなど、心ならず隔て侍り。(巻一、五三頁)

源宰相の娘で、容貌は良くないが、奥床しい心があり、頼りにできる女性として権大納言に認められている。女御に仕える女房ともなれば、まず容姿の麗しい女性であることが従来の物語では望まれてきた。人柄の良さを強調し、それが故に「つひ(終)のよる瀬」とまで思わせるところに、作者の主張が込められている。

但し、この段階では、宰相の娘はまだ権大納言に関係を持った女性の一人にすぎない。ところが、その後、次々と多くの人が死ぬ異様な事態が生じて、娘の母も死ぬ(巻二、六三頁)。そこで、娘の身を案じた権大納言は、女御の母は既に亡く、女御の後見を十分にしないこともあって、母親代りとして「ありし源宰

相の娘、心にくくよき人なり。女御の御後見につけ聞えむ」と、出仕させようと決意する（巻二、八九頁）。

しかし、この直後、宰相の娘は約一年間物語から姿を消す。後に述べるように三位中将が里に下っていた女御の許に忍び入ったため、女御は懷妊し、極秘裡に若君を出産するという事件が起ったからである。その折には、女御の故大弐の乳母の娘で、大納言・少将・小侍従の三姉妹が懸命の働きを見た。宰相の娘が再度浮上するのは、女御の出産事件を無事に処理した大納言の君と少将の姉妹が、お礼参りに清水観音に参籠した時に、同じく清水寺に来て居た宰相の娘を垣間見る場面に於てである。

三十ばかりにやと見えて、あてになまめかしく、しなやかなる様して、……いとあらまほしくなつかしき様したり。……あらまほしき事のみぞ多き人の様なる。……（大納言は）「常に殿（権大納言）の、『あらまほしき人なり』と宣はするに、よき人かな」と少将と語らふ。（巻三、一四二―三頁）

三〇歳ほどで、若くはない。容貌についての描写はないが、一途にへ理想的な女性」として繰り返し強調される。この事は、権大納言の北の方に報告される（二四六頁）。そして、一年ぶりに女御が宮中に戻ろうとする時に、「うへ（女御の義理の姉で、権大納言の北の方）は、（女御の）御後見なき事を歎き給ひて、源宰相の姫君のこと宣ひわたる」（巻三、一四七頁）と、源宰相の姫君の件が俄に具体化する。関白内大臣（もとの権大納言）からの、

「若々しくかけ／＼しき筋などにもあらで、ただ女御の御後見に、さりぬべく思ひ奉るを、聞ゆるままに参り給はば、おろかなるまじく」と、返す返す宣ふに、（巻三、一五〇頁）

という要請によって、ついに仕出が決った。〈対の御方〉と称した。そして、ここにおいても、

心にくくあらまほしき御さまなり。……御さまの、若う美しげにて、人の親めき給ふも似げなくなむ。……げにとあらまほしき人の御さまなり。……女御殿対面し給ひて……（対の御方が）按察の故うへ（女御の故母上）の御もて

なし気配御心遣ひなどに似給へるに、あはれになつかしく、昔思し出でらるる折々あれば、女御も嬉しと思す。……年は三十に一つ二つばかりぞ余り給ふべき。人がらなつかしくしめやかに、なげのすさびもやさしく、物ごとに каどありて、心あらむと見ゆるに、さればよ、殿の御心とどめて宣ひしうべなりけりと、思ふ事のみ多かり。（巻三、一五一―二頁）

と、まさに枚挙に遑のない程に、対の御方の理想的な人柄が誉めちぎられているのである。いくら素晴らしい人柄とはいっても、対の御方は所詮女御の世話役なのであって、中心はあくまで女御であるはずだ。その女御が霞んでしまうほどに、脇役的女房が誉め称されているのである。後見役的女房を誉めることで、結局は主人である女御を称えることになる、などという域を遙かに超えている。物語においては決して重要な人物とは言えず、身分も源宰相の娘という低い所にありながら、人柄が理想的だということだけで皆に認められる。それは、後妻として嫁した按察使大納言の北の方が、継子の大君や頭中将に対しても実子以上に誠意を尽くして養育したその「御もてなし気配心遣ひなどに」対の御方の人柄は似ているという。これだけでも、この物語の作者が追求めたものの一端は明白であろう。

対の御方は、その後〈御匣殿〉となり（巻四、一六四頁）、女御の後見役として希望を集め、女御に御子が誕生した時も、帝の御前に「御匣殿、御守・天兒・御佩力など持てゐざり出で給ふ」（巻四、一七四頁）と、晴の舞台に立つのである。

宰相の娘が物語に初めて登場してから、再び浮上するまでに、約一年間の空白があることは、決して自然ではない。これはどの理想的な人物であれば、女御が三位中将の子を懷妊したことで侍女達が苦悩する折に、宰相の娘も加わっていい良いのではないかと思われる。しかし、改作の際に多少手を加えたぐらいで生じるような部分的な構想の変化ではないので、原物語においても、宰相の娘はその理想的な人柄故に、晴の場に登場し、読者の注目を集める女房として設定されていたものと思われる。脇役とは言え、主要人物の陰に隠れる没個性的存存として終始するのではなく、充分に活躍の場を与えようとする作者の意識が、作品の質を大きく変えていくことになるのである。

(三) 情と誠意の女房——大納言の君・少将・小侍従——

対の御方が晴の舞台に立つ女房であるならば、女御（按察使大納言の三君）の乳母である故大貳の乳母の娘の大納言・少将・小侍従の三姉妹は、まさに陰の部分で活躍した女房達である。

按察使大納言の北の方（後妻）が、病が重くなって死を覚悟した時に、まだ結婚せずに居る三君を枕許に呼んで、

（三君の乳母の）大貳の乳母亡せにしをこそ（心細く）思ふに、我さへ（三君を）打捨てて（死んだならば）、（三君は）いかに心細からむ。（三君の）御乳母子三人、大納言・少将・小侍従などぞいふ。姉は按察殿（北の方の夫）の御子とぞ名のるめる。さればにや、よしめきたるまみ口つき、なべての人にはあらず、心ばへのどかによき若人なれば、いづれもかたはら去らであらせ給へ。（巻二、六四頁）

と遺言した折に、三君の乳母であった故大貳の乳母の三姉妹の名が初めて登場した。中でも、姉の大納言の君は、按察使大納言の子であるから、三君とは異腹の姉妹ということになる。この大納言の君を中心とする姉妹達は、按察使大納言の北の方の死後は、故乳母の代わりとして、かつ母親代わりとして、三君を守り続けていくのである。

帝が退位し、冷泉院に入られ、二〇歳の新帝が即位した。その「霜月、大嘗会（だいじやうゑ）の女御代には按察の姫君参り給ふべしと聞ゆ」（巻二、八四頁）と、三君が女御代を勤めることが決定した。

さて参り給ふ儀式、おろかならむや。関白殿（元の権大納言）・大将殿（元の権中納言）・按察殿・頭の中将・宰相の中将、立ち続きて経営し、大納言の君（少将・小侍従の頭）・少将の侍従など、思ひのままと見るにも、（巻二、八五頁）

と、三君の晴姿を見つめる乳母子三人の心情を描いていく。その後、改めて「女御はうちへ参り給ふ。儀式いとめでたし」（同）、「神無月二十八日女御入内」（同）と続いて、三君は藤壺女御と称される。

ところが、按察使大納言が病となり、藤壺女御が内裏から退出していた夜に、三位中将（新中納言）が忍び入り契りを結ぶ。気が動揺した女御は、

ただ弱りに弱り給へば、（三位中将は）いとど悲しくて泣き居たるにぞ、大納言（の君）うちおどろきて見るに、（女御は）おはしませず。こはいかにと思ふに、御帳の内に人の気配するに、怪しくて、参り寄りたるに、馴れ顔なる男添ひ臥して、泣くなりけり。あさましとおろかなり。……（大納言の君）

「只はや疾く出でさせ給へ。（女御に）御加持なども参らむ。ひたすらに（女御は）亡き人にこそはおはしませ」と……「只疾く」と出だしやれば、

……人々まうのぼらぬさきに、（大納言の君は）小侍従と二人して、（女御を）もとの御床にすゑ奉りて、「いかに思召さるるぞ」と聞ゆるに、（女御が）少し見あげ給ひて、御涙のこぼるるぞいと心苦しきや。（巻二、一〇七―八頁）

新中納言の闇入事件は、彼にとっては長年の願いの達成であるが、女御とその侍女大納言の君姉妹にとっては、まさに青天の霹靂であった。まして大納言の君は「わが過ちの心地」（二二〇頁）と思うだけに、なおさらである。とっさに、他の者には知られないように処置をする才覚を見せるが、これを契機に、対の御方とは異なり、陰の部分での働きが要求されてくる。作者が主張しようとすることの一端も、この侍女たちの働きの中に込められているはずである。

以後の物語は、女御の母親代わりであり、大納言姉妹を統率する立場に居る大君（関白の北の方、女御の異腹姉）を中心に展開する。

女御の様子に不審を抱いた大君は、大納言の君に事情を聞いて驚くが、彼女と相談の上、女御は病氣であると公表して、極秘裡に事を運ぼうと決意し、まず、二月一日に按察使邸から関白邸へと女御を移し、人々を遠ざける。大君は女御の懐妊に気づく。大納言の君は、それにつけても、「あさましとあきれて、物も覚えず」（二二三頁）と悲嘆にくれる。翌年七月の出産まで、人々の苦悩は続く。

二月には、大君が一人で女御に腹帯をさせる。そして、大納言の君を呼んで、妊婦の折の祈禱を相談するが、女御の身案する大納言の君は、懐妊の噂が世上に漏れることを恐れて、何と答えてよいかわからない。

二月十一日初午にて、稲荷へ人々参るに、(女御は)ありしよりけに沈みまされ給へるを、大納言の君、すこしおしすゑ奉りて、(大納言)「お前の梢ども気色ばみ、霞める空の気色も御覽せよ」と聞えさせれば、(女御が)打見やり給ひて、「沈みつる程に、木の芽は春の」と打涙ぐみ給へば、(大納言の君は)いとほしく心苦しくて、大納言の君、

咲き匂ふ花待つ程ぞうち曇り霞める空もしばしながめむ

とて打泣くに、女御殿、

ながらふる身をし歎かむ時ぞとて花待つ程の心だになし

とて御顔入れ給ふ。心苦しげなり。(巻三、一二三頁)

女御の悲しみを慰めようとする大納言の君の懸命の姿である。二首の和歌を挟んで描かれたこの場面は、女御の身を守り通そうとする侍女の精いっぱい誠意を述べんとしているのであって、その意味で、当物語の象徴的なコマなのである。女御を懐妊させた当の三位中将(新中納言)は、初瀬に出かけては「(女御への)この思ひやめ給へ」(一二三頁)と祈る一方、大納言の君へ文を送っては女御への仲介を頼み続けている。それにつけても、

日ごとに(三位中将からは)音づるなれど、いひ返し侍れど、つれなくぞ。世の中は私ごとと思ふなる。按察殿なども遂に(女御の懐妊のことを)聞き給はむに、いと恥かしくこそ。君(女御)の泣き濡らし給へる濡衣は我のみぞ着る。(巻三、一二五頁)

と大納言の君は嘆きを深め、全ての責任は自分がとろうとまで思うのである。

二度目に初瀬に参籠した三位中将(新中納言)は、不思議な夢を見る。それを大納言の君に文で知らせたところ、初めて返事が届いた。そして、大納言の君の妹の少将が訪れて、女御が懐妊していて、七月に出産があること、生まれてくる子供の処置に人々が苦慮していることを告げる。すかさず、三位中将はその子供は自分が引き取ることを申し出る。初瀬で見た夢を契機として、三位中将(新中納言)と少将とが会って、子供を引き取ることが決定する場面も印象的な部分である。

それは、三位中将に子供を与えることとしたプロットにある。既に、初瀬で三位

中将が夢を見る以前に、

さても故治部卿の律師など、「さし出で給ふ人(女御の子供)あらば、ただこのいふかひなく思ひ歎く人(三位中将)に奉り給へ。男はおのづから紛る事もあらむ。(三位中将に対して)いとほしくさてあるべきにあらず」とぞ宣ふ。殿・大将のうへ(大君・中君)もげにと思しなりて、(大君)「この度(三位中将からの)使あらば、文受取りて聞えよ」と宣ふ。(巻三、一二五頁)

と、女御の叔父の律師(妊娠の祈禱の際の僧)から、三位中将の心中を察した提言があり、大君・中君たちも承諾していた事ではあった。そして、律師の言葉にあるように、「いとほしくてさてあるべきにあらず」と、三位中将を決して気の毒な目にあわせてはいけないという、人の心を第一としての解決策であったことが、この場面を印象深くしている所以でもあった。勿論、女御はこの子を連れて宮中には戻れない。生れ出る子供を見る人物として、三位中将の育ての母・大宮が適している。それが女御の身を守ることにもなる。しかし、そのような周囲の事情はそれとして、ここでの論理は、やはり律師の言葉にある人の情を第一として組み立てられていると素直に読むべきである。そこに作者の意図もあろう。

以後の物語の進展は速い。三位中将の垣間見を許すなかで、

火の方に向きて大納言の君(女御を)抱へ奉る。少将(少侍従(女御の)御手をとらえて泣き居たり。……暫しありて、(女御は)みじろき給ひて、すこしふるひ給ふに事(出産)なりぬ。殿のうへ(大君)御臍の緒おし切りて、単におしくみて少将がふところにおし入れ奉り給ふ。(少将は急ぎおり、さし奉れば、(三位中将は子供を)御ふところに入れて出で給ふ。(赤子の)いとほしさに、少将・小侍従、(三位中将の)御あとにつきて(赤子を)見送り聞ゆ。(赤子にとって)さばかり頼もしき(三位中将の)御ふところなれど、(赤子が)一所わたり給ふが悲しきなるべし。(巻三、一三七～八頁)

と、大君や大納言の君姉妹の手際の良い働きが展開される。出産場面の相当細かい描写と、生れる子の父親とはいえそれを三位中将が垣間見しているという特異な設定である。二度とは女御と会えない三位中将に対する最大限の慰めであると読

むべきか。その情況の中で、一人連れられてゆく赤子に寄せる少将・小侍従の哀切の情を描くことを忘れない。

全てが終わった。ごく一部の者が知るだけで、秘密は守られた。女御の父按察使大納言ですら、女御が出産したことを知らないままに、按察使大納言一族の安泰は保たれたのである。三箇月後の一〇月朔日、一八歳の女御は盛大な儀式と共に内裏に戻った。この間の事情を知らぬ対の御方に晴の場での活躍を譲ったものの、大納言の君姉妹は以後も女御の側に付き添っている。

四 直情的な女房——中将——

勿論、すべての女房が皆大納言の君姉妹のように描かれているわけではない。『海人の刈藻』には驚くほど多くの乳母や侍女が登場するが、その中には様々な挙動をする者がいる。幾例かを示してみよう。

まず、権中納言（故兵部卿の長子）が按察使大納言の中君（女御の姉）の部屋に忍び入った折に、それを発見した侍女の中將の言動である。

〔中將は〕あさまして、「はや疾く出でさせ給へ」と言へば、……中將、〔中君は御心地を煩ひて御帳におはします、（母上様）はや疾く渡らせ給へ〕と（女房に）いらふるに、……中將はとかく言ひ腹立つ程に、上（中君の母上）おはする音して……。（巻一、三五―三六頁）

中君の侍女中將の発した言葉のみを抜き出してみた。それでもわかるように、あたかも『源氏』の右大臣が、臘月夜の許に忍び入った光源氏を発見して逆上したのと同様に、女房の中將は、侵入した男（権中納言）に向けて、感情を露骨に現している。更に、この事件の全てを中君の母親（按察使大納言の北の方）にも話してしまふ。

この場面には、権中納言の哀訴と中君の困惑の描写は少なく、むしろ侵入した男と対峙する女房中將の姿が印象的に描かれている。さらに、この直後に、母親が事態を知って苦慮する場面においても、侵入者を権中納言か三位中将だろうと見当をつけた母親に対して、侍女の中將は、

昼さし並び給へるだに見分き難く侍るを、暗き程の御気色、いかでか知り侍るべき。（巻一、三八頁）

と、心にあることを遠慮もなく言い放っていることなど、実によく物を言う侍女として登場しているのである。

四 気が強く積極的な侍女——侍従——

また、按察使大納言の先妻腹の宰相中將（もとの領中將）が、按察使大納言の三人目の妻の連れ子である中君に通っていたが、夜離れが続いた。そんなある日の出来事である。

〔母親が〕障子さしの細目にあきたるより（中君の部屋を）見給へば、侍従（中君の侍女）袖より（宰相中將の）文を取りいだし……（中君に）奉れば、姫君は「（返事を）やらむとも思はざりしものを」と言ふに、（侍従）「何か苦しからむ。今様は、女がた進みてこそよき事も侍れ」とて、君（中君）の読み給ふ方あけて見て、（侍従）「したり顔にも、（宰相中將は）われ一人忍ぶる事のやうに宣ふかな」と言ひ笑ふを、うへ（母親）見給ひて、いと口惜しく、……例の腹立たしくて、「……これはこなた（中君）より進みたるさまなるは、いつよりの事ぞ。程程にけりと見ゆるに、（宰相中將に）つゆ気色見えぬは、（結婚の）志のなきなめり」と、（母親は）あまり腹の立ちければにや、侍従を引きかなぐり打ち張りなどして、（母親は）「懲りぬや／＼」と宣ふに、かれ（侍従）も怖ろしきものにて、「侍従がしたる事ならばこそ懲りはせめ」と言ふに、（母親は）いとど腹立ちて、「はや往ね往ね」と追ひ立て給ふに、（侍従の）姉の左衛門、「（母親の言葉は）御ことわりにてさぶらふ。なさぶらひそ」とて（侍従を）出だしつ。（母親は）君（中君）をもさやうにせまはしけれど、さすがにて、文を（中君の）顔になげかけ、障子荒らかに引立てて入り給ひぬ。（巻三、一三三―三五頁）

引用が多少長くなったが、ここは極めて特異な場面である。女の方から積極的に出るのが当世風なのだと言ひ切る侍女の侍従。その侍従を引き倒し打ち据える

母親。それに真向うから立ち向かう侍従。当然あり得る光景だが、それにしても何と強い母親であり、侍女であることか。ここを描いた作者の意図は何か。

この場面の前後には、女御の妊娠に苦慮し続ける大君や大納言の君達がいる。その最中にこの場面が挟まれる。本来ならば、この母親は、按察使大納言の北の方として、大君を助けて女御を見守る立場にある。同じく後妻に入った人であるが、あまりにも人柄の異なる母親である。そこを強調することが、このエピソードを挿入した最大の目的であることは確かだ。だが、その結果として、明らかに変化しつつある女房像をも照らし出すこととなった。特異な人物としての、『源氏』の近江君や、『狭衣』の今姫君とその母代^{はしろ}の烏齋な挙動とも、また異質なのである。侍従の言動にしても、単に侍従一人が特殊な人物だというのでは済まされない、女房層全体に亘る思考の変化といったものを考えてみる必要があるのかも知れない。

内 家の意識

『海人の刈藻』の最後は、関白内大臣（もとの権大納言）の一家を称えて、

この御末々栄えさせ給ふ事、めでたかりし事なり。遂に右大將は殿（関白）の御婿にてかしづき給ふ。中納言は朱雀院の姫宮をあづかり給ひて、とりくの御有様を、内のおとど見奉り給ひける。「御命さへ（関白の）御心のままなりける」と、世人も申し伝へけるとぞ。（巻四、二二二頁）

と結んでいる。関白の大君は今や帝の後であることを思えば、関白一家の繁栄は頂点に達したと言える。右に引用した物語の結びを見る限り、左大臣→権大納言（内大臣）と関白職が受け継がれて、関白一族が栄えることを述べたのが当物語であるような印象を受ける。だが、『海人の刈藻』の題名が三位中将の女御への叶わぬ恋に身を焦がす所に起因していること、また、関白家の繁栄といっても、その北の方の大君は女御の姉で、やはり按察使大納言の娘であること、更には、三位中将と並んで重要な人物である権大納言も、同様に按察使大納言の娘・中君と結ばれて、その子供の大君は春宮の妃の地位に居る。つまり、女御を初めとし

て、主要な人物の北の方は全て按察使大納言の娘によって占められているのである。また、按察使大納言の後妻（継母）は、その人柄の良さ故に、人々に絶賛された人でもある。以上のことから、たとえ最終的な結構は関白家の繁栄であつても、その内実は、まさに按察使大納言一族の繁栄の物語なのである。嵯峨院・冷泉院・朱雀院・当帝と四代に亘る物語も、宮中を舞台とした場面は極端に少なく、そのほとんどは按察使大納言に関わりを持つ者たちによって占められてきた。見方を変えれば、按察使大納言というその官職に象徴されるように、決して恵まれているとはいえない立場に居る一族が、いかなる経緯と苦難とを経て栄えていったかを語る物語であるとも言える。そこに家の意識が生じる。物語に登場する女房も、宮中に居る女房ではなく、ほとんどが大納言の君姉妹に象徴されるように、家の姫君に仕える女房であつて、それらが物語に重い位置を占めてくるのである。当然の結果として、女房に要求されることは、美貌よりも、家の運命を担う姫君を助けていく誠実な人柄と行動力ではなかったか。朝廷の衰退によって、宮中を舞台とする物語を描き手が減少したことも事実であれば、興亡の激しい家（一族）と運命を共にする人々が増加したことも確かであろう。物語が変貌し、脇役達が據頭する理由の一端を、『海人の刈藻』に見ることができよう。

四、『吾の衣』——ひたすら女房像——

『吾の衣』の骨組みは、『海人の刈藻』と同様に、関白家の関白職の継承と、その関白家と姻戚関係結び、ついには春宮女御を出すに至った権大納言一族の繁栄を継糸とした物語であると見なすことができる。そして、物語の前半は関白と権大納言のそれぞれの子供が中心となり、後半は各々の孫が主人公となるわけ

だが、孫の時代になって物語は錯綜してくる。それは、春宮の女御に、春宮の弟である兵部卿宮が思いを寄せて若宮（後の春宮）を生ませてしまったことに起因する。形としては『海人の刈藻』に近似した、女御が絡んだ愛のもつれという図式である。そして、そこにまた、脇役達の行動する場が生じてくる。

(一) 秘密を守り通す女房——中將の内侍——

後に春宮の女御となった右大將の姫君は、母上の死後に父の右大將も出家し、両親がいなくなった為に、父親の姉・中宮に養育されていた。中宮には春宮と兵部卿宮の二人の皇子がいたことから、特に兵部卿宮は姫君と「まことのいもせのやうに」〔注目〕過ごしてきたことから、『狭衣』での源氏宮を慕う狭衣のように、自ずと愛が生まれていた。その姫君が、兄の春宮と結ばれたのだから、兵部卿宮はたまらない。兵部卿宮は周囲の勧めのまに、式部卿宮の姫君の許に通つてみたが、心は鎮まらない（巻四、一二七頁）。

ついに、病氣見舞いに春宮女御が中宮の許に來た折に、忍び入って契りを持った（二二〇～四頁）。

近く人の泣く気色のすれば、中將の内侍^{ないじ}丁の前に臥したるが、うち驚きやをらさぐり聞ゆるに、男の気色すれば、もの覚え^なずあされまどひて参りつゝ、
「いかなる人なれば、かくおほけなき心遣^し〇給ふにか」とて、忍びつゝ聞ゆれば、（二二五頁）

と、女御の侍女・中將の内侍は、男を発見して驚くが、決して騒がない。男に対しても、

世の中の恐ろしくのみ覚ゆれば、（男を）とく出だし聞えむの心のみ深くて、
こと受けをやすらかにしつゝ居たり。（二二六頁）

と態度をくずさず、また、女御に対しても、

（女御の）御袖の雫などの、人目怪しかりぬべければ、あらぬ御衣ども
着せ替へ奉りて、さりげなき様にて臥しぬ。（二二七頁）

と平静を装うことで、これを切り抜けていこうとする。翌朝参つた中將の乳母に

も、口を閉ざしている。『いはでしのぶ』の尚侍が見せたのと同様の、この強固な意志は、決して我が身に降り注ぐ非難に恐れおののく故にのみ生じているのではないだろう。我が身よりも、女御の身を案じてのことであろう。中將の乳母にも知らせず、兵部卿宮から女御への文も、内侍は自分の私信の形で処理している。女御は、後に兵部卿宮の若君を出産するが、春宮の御子として愛育され、誰もそれを疑わない。同様に女御に御子が生まれるという密通事件でありながら、『海人の刈藻』は大君を初めとする女性達の連携で、極秘裡に処理されたのと比べて、『吾の衣』の場合は内侍一人の胸の裡に秘められてしまうという違いはあるが、この中將の内侍にも、それを最後まで守り抜くという強固な意志を持つ女房として共通するところがあり、その点が極めて印象的に描かれている。

(二) 住吉へと物語を導く女——小太夫・尼君——

『吾の衣』の脇役の中で、その挙動が最も注目されるのは、住吉に関わる人々である。物語後半の主人公・兵部卿宮は、ここでもそれに深く関与する。

話は遡るが、内大臣の東院上には子供がなく（『狭衣』の洞院上と同じ趣向）、弟中納言の娘を養女にし、帥宮に嫁がせていた。ところがその養女に双子の女子が生まれたために、妹の方を公表し、姉の方は隠して中納言の乳母に預けておいた。この双子の姉が、春宮の女御に面影が似ていることから、兵部卿宮が通つていたのである。

種々の事情があつて、この双子の姉君は、母親の死後、そのおばに当たる人で、対の君と称して式部卿宮家に仕えている人に引き取られていた。式部卿宮には姫君がいて、姉君とも親しくしていたのだが、その姫君は兵部卿宮を婿にしていた。そのため、式部卿宮の姫君に通っているうちに、兵部卿宮は、対の君に養われている春宮女御に面影の似た姉君に近づき、深い仲となつたわけである。ところがそれが式部卿宮の北の方や対の君に知られ、姉君は身籠つた体で住吉へ逃れたのである。その時に猷身的に世話をしたのが、侍女の小太夫と、中納言の乳母の姉で住吉に居る尼君である。

自らの手でひそかに髪を削いだ姉君は、小太夫一人を伴って夕闇の中を出京する。

はかなき櫛の箱一つばかりを取り具して、やがて小太夫ばかりぞ乗りぬる。道すがら思ひ離れず、(涙に) 暇なげなる(姉君の) 御袖の気色(を)○小太夫もいかになり給ふべき(姉君の) 御身にかと、悲しう見奉り(る。かくて今宵はうつまさに参り給ひて)。いまだ夜の内にぞ住吉へ渡り給ふ。(巻四、一六三頁)

ようやく住吉に着いた姉君を迎えた尼君は、

あるじの尼君○待喜びつゝ、ゆへくしくしつらひ据(ゆ)へ聞え侍るに、(姉君が) かゝる身にてさへおはしけるに、心おさなくやつし果て給けるぞ心憂く悲しと思ひける。(一六四頁)

と、髪を削いだ姉君の姿に悲嘆する。ここを初めとして、尼君と小太夫は、悲しみに沈む姉君を懸命に支えていく。

冬になって、姉君は兵部卿宮にそっくりの男子を出産した(二七四頁)。だが、その喜びに浸ることもなく、姉君は受戒し、尼の身となり、新年を迎えて間もなく逝去する(二七七頁)。兵部卿宮も不思議な夢の知らせで、姉君の死を悟る(二七九頁)。

その年も秋を迎えた。尼君と小太夫は、故姉君の遺児・若君を愛育していたが、あまりに美しく成長するので、

いかで(兵部卿宮の) 御ゆかりの人に尋ね逢ひつゝかゝる事をも聞へむと思へど、かゝる山がつと成ては、さやうのしる人(こゝろ)もなければ、住吉へ度々に参りつゝ、「聞こえつべき人に逢はせ給へ」と、小太夫・尼君などは常に申けり。(一八八頁)

と住吉の神へ願ひ続ける。ところが、同じく姉君を尋ね歩いてきた対の君は、住吉に参ったその夜の夢の知らせで、尼君たちに逢うことができたのである(一九九頁)。その後、若君は兵部卿宮の許に、小太夫が付き添って、引き取られていった。

長編『苔の衣』は、様々な問題を含んだ物語である。それは、中世の物語の一

典型を示していると言ってもよい(注12)。それにしても、ほとんど重要な人物とは考えられなかった東院上の養女が産んだ双子の姉君が、なぜ物語も後半の巻四に至って、急にクローズアップされてくるのであろうか。どうして、住吉の地を舞台とする必要があるのだらうか。勿論、『苔の衣』が『住吉物語』の影響下にある、構想も酷似していることは承知の上だが、『苔の衣』の全体の構成からすると、決して自然な成り行きとは思われない。『苔の衣』にも、継母・継子の関係は随所にあり、いつでも継子物語として展開する可能性は秘められている。双子の姉君が、式部卿宮の北の方の許から逃れて住吉に行くことは、型の上では継子物に近いが、内実は継子の関係とはなっていない。しかし、それでも敢えて住吉を志向する所に、あるいは中世の物語の特徴が認められるのかも知れない。

ともかく、住吉に姉君が逃れたことによって、小太夫・尼君を初めとする脇役達に急にスポットが当てられて、活躍の場が与えられたことは確かだ。それに対の君なども加わって、『苔の衣』の後半は、物語は主役達の手から脇役達の手へと移った様な感じすらするのである。

五、『小夜衣』——情深き女の物語——

『苔の衣』が前半と後半とは、物語構想の緊密さに多少欠けていたのに対して、『小夜衣』は継子物語という型に乗って、物語は一貫している。

『落窪物語』『住吉物語』がそうであったように、継子物を描く『小夜衣』も、本来ならば物語の主人公にはなれない継子がめでたく栄えるという陰には、継姫君に献身的に仕える女房の存在が、当然必要となる。それだけに脇役の活躍が目立つ。脇役の働き如何に継姫君の運命がかかっているからである。継姫君の繁栄にこそ、下級の女房たちの願望が込められていたということでもある。

(一) 対の君を支える侍女——右近・小侍従——

物語が開始されるとすぐに、女房の宰相の君から、

さきの腹の姫君こそ世にはありがたき人の有様に侍れば、(注13)

と紹介された『小夜衣』のヒロイン山里の姫君は、按察使大納言の先妻の娘で、母の死後、祖母の尼上に育てられていた。宰相の君の話を耳にした主人公・兵部卿宮（中宮の弟）は、山里を訪れて契りを結ぶ。ところが、姫君は間もなく按察使大納言の後妻の許に引き取られ、後妻の姫君が梅壺女御として入内する折に、その母代として出仕し、対の御方（対の君）と称された（六六～七頁）。このことを兵部卿宮は知らない。

女御の許を訪れた帝は、母代の対の君を見てその美貌に心ひかれ、以後何かにつけては対の君に会おうとする。それが女御の御乳母子の小弁君に発見され、継母に通報される。継母の怒りをつけた対の君は、継母の策謀によって、民部丞の屋敷に閉じ込められてしまう（八九～九〇頁）。対の君に付き添っているのは、右近・小侍従の二人の侍女である。ここからが二人の侍女の活躍の場なのである。

人々（右近・小侍従）君（対の君）もいかにとあきれあひたり。とかく思ひめぐらせど、思ひやる方なし。たゞ三人して泣きあひたり。右近おとなしきものにて、「この事心得あり。いつぞや（対の君の）御局に、上の入らせ給ひたりしに、小弁の君のまゐりあひて、（帝を）見給ひて、（小弁の君は）折悪しくも参りにけりとて、気色悪しげにて立ち給ひて、その後（対の君に対して）人の口安からずうけたまはりしに、また一日（帝が）入らせ給ひたりしを見る人のげに／＼しく北の方（継母）にも申して、昔物語のやうにとりこめまゐらせ給ふにやとこそおぼえ侍れ。さらでは何しにかゝる中宿は侍るべき」とて泣くに、君（対の君）も小侍従もげにさこそ（継母の策略だ）と思すにも、今日よ明日よと思ひながら、今まで（宮中からの退出を）思ひたまざりける事こそ心憂けれ。（九〇～一頁）

と、嘆き悲しむ一方で、対の君が閉じ込められるに至った原因を分析する才覚を示す。この右近を中心に、物語のおよそ三分の一の量を要して、その奮闘ぶりが記されていく。

対の君を救い出すきっかけを作ったのが、閉じこめられた民部丞の家の妻である。民部丞は『落窪』『住吉』と同様の趣向に沿って、閉じ込められている対の

君を我がものにしようと思っている。しかし、その妻は、

女（妻）はかゝる（民部丞の）心を心得たれど、知らず顔にのみもてなして、心ひとつに思ひ乱るゝ。いかにもしてこの人（対の君）をいだしやる事もがなと、思ひめぐらせど、我より外に、この御方に参る人もなきに、（対の君が）うせ給ひなば、われ心あはせたりとこそ（民部丞が）思ひて、しかりはらだゝむ事も恐し。（二二頁）

と民部丞を恐れながらも、対の君を救い出す方法を考え始める。それが右近たちにも通じて、親しく話をするようになり、妻の身上話から、女房の宰相の君を共に知っていることがわかり（二二七頁）、さっそく対の君の手紙を持って、妻はひそかに宰相の君の許を訪れた。これに依って事態は一気に解決に向かった。宰相の君の連絡で事情を全て了解した按察使大納言は、民部丞の家に行き対の君を救出した（二四五頁）。その後、対の君は兵部卿宮と結ばれ（二五四頁）、やがて兵部卿宮は春宮を経て（二五八頁）帝位に即いた（二六七頁）。対の君は今や後の身分となった。対の君に仕えた右近・小侍従、それに民部の妻は、

その心よせの女房（民部丞の妻）は、中宮の御かた（もとの対の君）にまたなき人に思し召されて、新少将の君と聞えしが、今は命婦になりけり。……小侍従は内侍になりぬ。右近といひしは中納言になりぬ。花の咲き出づるやうにめでたし。（二六八頁）

とそれぞれに昇進して、后に仕えている。物語の最後で「かまえて人のためには情ある事と見えたり。」（二七一頁）と説き、「人のめでたき例には、山里の姫君にまさる人あらじと見えたり。見給はむ人々も思ひやり給ふべきなり。」と閉じているように、継子の栄えを目的とする物語であってみれば、それは当然とも言える。しかし、ここでは、継子の栄えという最終目標に的を絞るのではなく、それを支えている、情と誠意に基づいた脇役達に重点を置くことで、物語を見直してみようとしたわけである。そうすることで、作者なり享受者なりの意識の投影をみようという狙いがあったからである。その意味からすれば、継子を扱った『小夜衣』こそは、それを充分に見せている作品であるといえるのではないか。

六、まとめ

『いはでしのぶ』『海人の刈藻』『苔の衣』『小夜衣』といった王朝末期から中世にかけて作られた物語を取り上げ、『海人の刈藻』を中心にしながら、脇役達の言動に注目してその働きのほどを述べてきた。

もとより、脇役が居て主役も居るといのが世の常である。物語のみにそれは限ったことでもない。勿論、すでに『源氏物語』の宇治十帖においては、第一部長編系列での栄華達成に邁進する光源氏の如き主人公像を描き得ないのとはとより、玉鬘十帖や第二部での光源氏像をも殺さなければならぬほどに、物語の主題は止揚し続けられていた。作者が「受領の家の女性として」^(注15)形成されていた精神の状態で、その思惟の深みとを知れば、安易に主役(群)と脇役たちという構図で捉えることはできない。だが、それ以後の物語においても、主役(群)は存在している。ただし、その内実においては、主役(群)をあくまでも前面に押し立てての物語と、主役の目の届かない所で、あるいは主役と一緒にあって、脇役達が相当地に活躍の場を与えられている物語とがあることは事実だ。前者が『狭衣』『寝覚』などに代表される物語であれば、後者は例えば以上に取り上げた物語などを挙げることができる。そして、その脇役達の活躍する場面にこそ、中世の物語の特質の一端が見られるのだと思う。つまり、益田勝実氏によって強調されてきた「家の女性達」^(注15)の価値感が、物語の中に存分に投入されてきたことを物語っているのである。

『いはでしのぶ』の尚侍も、『海人の刈藻』の三姉妹にしても、また、『苔の衣』の小太夫や尼君、『小夜衣』の右近・小侍従・民部丞の妻にしても、はっきりとした言葉を吐き、行動力の伴った人物として描かれていた。それは、『海人の刈藻』において著しかったように、物語の舞台が宮中を中心とするのではなく、家なり一族なりといった比較的コンパクトな所となっていたことにも原因がある。舞台が小さくなれば、侍女の言動の一つ一つが、仕えている姫君の運命を左右することにもなりかねないのである。それだけに、侍女たちの挙動が注目さ

れるということにもなる。また、継母かどうかということも、一層重要な要件となつてこよう。『源氏物語』や『狭衣』と比べて、物語のスケールが小さくなつたために、『源氏』であれば近江君の言動は烏辭な性格の人として一笑に付されるだけで、物語全体にはほとんど影響がない。また、関根賢司氏の指摘される如く^(注16)、『狭衣』には洞院の上の今姫君とその母代の不可思議な挙動を初めとして、「下級女房の生熊」が詳細に、かつ、相当数の場面に描かれている。しかし、それも「両主人公の理想性」を確保しつつ、その対照として「世俗的な世界」が描かれていくという要素が保持されている。そのために、それは、やがて物語の大流に吸収されてしまうのである。しかし、中世の物語にはそれがない。すぐに物語に響いてくる。というより、響くように構成されていると言った方がよいかも知れない。それだけに、脇役と言えども、『いはでしのぶ』の尚侍のように、時には大きく物語を転回させることにもなるのである。そこにこそ、中世の物語のダイゴミもあるのである。

『住吉』の伝本の多さに象徴されるように、『小夜衣』などの継子物は、限りなく説話と密着していく。小木喬氏や桑原博史氏も言われていることである。そしてそれは、物語の世界が人々の営む生活の場に限りなく近づいていくことでもある。そこにも、脇役登場の理由がある。中世の物語を擬古と称する立場から論ずることは容易だ。だが、より当時の人々の実態と実感に即したダイナミズムの中で捉えなくてはならないだろう。この論は、私自身にとって、そのための叩き台のつもりである。

(注)

1. 『風葉和歌集』に採られた歌数を見る限り、『浜松』『寝覚』を越えて、『源氏』『宇津保』『狭衣』『風につれなき』に次いでいることから、『いはでしのぶ』が当時相当の評価を得るに足る物語であったことが知られる。残念ながら巻三以降の物語は未だ発見されていない。抜書きされたものが三条西本として唯一伝わるのみである。小木喬氏による三条西本の詳細な考察によって、八巻に及んだと想定される物語全体の構想をほぼ知り得るようになった。

2. 小木喬氏は『いはでしのぶ物語 本文と研究』(昭和五二年刊)において、本物語に

- 見える引歌の考察から、形式上は『新勅撰集』の選進の嘉祿元年（一二三五）を上限とし、『統後撰集』の建長三年（一二五二）を下限として、その一六六年間に成立したと思われるが、『新勅撰集』の流布の時間を考慮に入れる必要があるため、実際は一〇年そこそこの期間、すなわち、一二四〇～一二五〇と考えてよい、とその成立の時期を絞っている（四六頁）。
- 3、小木喬氏（注2）同書。三七八～九頁。以下、当物語の本文の引用は同書による。但し、適宜漢字を当てたところがある。
- 4、（注2）同書。五六頁。
- 5、『無名草子』の本文は富倉徳次郎著『無名草子評解』による。二三〇頁。
- 6、本文は国書刊行会『明月記』によったが、『海人刈藻函遊』の記述は、『海人刈藻、玉藻函遊』の誤りであることはすでに指摘されている。また、最近、松本寧至氏『玉藻』の脱落は『明月記』刊本の誤り（二松学舎大学『論究』第四号、昭五七・一〇）に、強く注意を喚起されている。それに沿いながら、他の部分についても、正しい表記を、本文の右側に示しておく。
- 7、『苔の衣』の主題——仏教的思惟による基調——（『弘前学院大学国語国文学会学会誌』第8号）「八衣」の系譜——狭衣・小夜衣・苔の衣——（『弘前学院大学・弘前学院短期大学紀要』第18号）
- 8、『海人の刈藻』の本文は宮田和一郎『校註海人刈藻』による。巻二、六八頁。
- 9、継母であるにも関わらず、皆に慕われる人として按察使大納言の北の方を描いたことは、継子物語が盛んな時代において、確かに特異と言えるし、当物語の重要な特色ともなっているため、機会を改めて論じてみたい。
- 10、『無名草子』にある「そのたま」という童は現存本『海人の刈藻』には見えない。権大納言（もとの三位中将）が出家する巻四の部分にあった場面かとも想像される。しかし、『無名草子』ではこの記述の直後に「さて出家し給ひて後」と出家後の記事に移ることから、この部分は出家する以前に、出家を志しながら再び初瀬に二日間参籠した折の最後の夜の夢に、女御への叶わない恋慕の情に同情して仏が登場した「うつくしき女の黄金の枝に史記といふ書を一卷つけて持給へるを、受取り給ひて（その女を）見れば、心尽くし聞ゆる人（女御）なりけり」（巻三、一二七頁）という場面での、もとの記述にあったことかとも考えられる。
- 11、『苔の衣』の本文は、久曾神昇校『苔の衣』（古典文庫）に依り、適宜漢文を当てた。巻四、一一三頁。
- 12、注6同論文にその一端を述べたところがある。
- 13、『小夜衣』の本文は清水泰校註『異本堤中納言物語』による。二頁。
- 14、益田勝実『源氏物語の荷ひ手』（『日本文学史研究』昭和二六年四月。日本文学研究資料叢書『源氏物語』所収）。
- 15、（注14）同書。
- 16、関根賢司『狭衣物語の世界』（『国学院雑誌』昭和四三年三月）